

進行 浅田

記録 若林

- 議 題 平成25年度 第2学校協議会
- 開催日時 平成25年12月7日(土)
- 開催場所 本校 応接室
- 出席者 [委員] 入江和男 委員 柿原勝彦 委員 澤田 裕 委員 芝井敬司 委員  
立石博幸 委員 永田 剛 委員 宮坂政宏 委員  
[学校] 平野裕一 (校長) 浅田和也 (教頭) 小梶芳忠 (事務長)  
山本尚 (首席・学習指導室長) 奥谷彰男 (首席・生活指導室長)  
若林伸治 (学年室長)
- 資料 「槻の木の新たな“強み”を創造するために②」

1. 澤田協議会長あいさつ
2. 平野校長あいさつ
3. 学校からの報告 山本首席「槻の木の新たな“強み”を創造するために②」
4. 質疑応答・意見交換

【宮坂委員】槻の木に求められているものをいくつかあげる。まず、教師力。教師力には、授業力、生活指導力だけでなく保護者など外部への対応などであるが、これが、学校経営計画などを踏まえ適切に改善されることが重要。2つめは、生徒の「学び力」。槻の木には、学びたい子供が来ているが、まじめな学びに加えて本当の意味で「学び力」をつけるためには、一定時間内にいかに効率的に学力を身に付けるかだけではなく、難しい課題（例えば参考文献を読ませて論文を書かせるなど）を何時間かかっても取り組ませるなど、質の高い時間マネジメントも必要。このことに対応するには教員の指導力も必要。3つめはカリキュラム力。槻の木は、自由度の高いカリキュラムを設定することが可能。その中で、教科間には重複する内容や目標もある。教科横断的なものを分析すると新たな授業の構想が築けるのではないか。若手教員を中心に組織的に取り組むことが効果的。学校からの報告の中で、「課題によれば強みが弱みになる」との指摘があったが、そのとおり。大前研一氏がいたコンサル会社が、成長率と売り上げのマトリックスを用いてこんな説明をしている。最初は売り上げが少ないけれど成長率が高い段階。次が、売り上げが大きく成長率が低くなる段階を経て、成長は止まっても売り上げが伸びるという強みが発揮できる段階。いわば伝統校はこの段階。成長率も売り上げも減ってくる段階をむかえないために、成長率が低くなった段階で、新しいプランを打ち出さなければならない。

【芝井委員】 槻の木が10年間を踏まえ次のステップへとのことだが、今がその時期なのかを判断することは難しい問題。チャレンジも大切だが、今までの取り組みを疎かにしてはいけない。バランスを間違えないでほしい。今までの取り組みを超えるようなものが必要。通常の教科で基礎的な学力を身に付けるだけでは、これからの世の中には対応できない。これは日本社会全体の課題。大学では、高校以上に求められているところ。グローバル人材の育成が議論され、コミュニケーション力・リーダーシップや問題解決型学習の充実が課題。大学の授業も大人数の講義式の形態から、少人数でのディベート形式などへの転換を求められている。高校からも新しいアイデアを生み出す人材の輩出が求められる時代。そんな内容をどう上手く入れていくかが重要。大学では「今まで通り」では予算がつかない状況に追い込まれている。高校では、基礎学力に加えて、大学や大学以降の職業生活も含めた人の生き方につながるよう部分も意識してほしい。

【宮坂委員】 先生方の資質向上ということ言えば、槻の木は若手もベテランも熱心な方が多い。府教育センターの教員研修の企画に関わる会議があり、高校教師のキャリアパスをどうしていくかという議論をした。若い先生が5年後、10年後、20年後、退職をどうしていくかを意識して、自分の力量をどう高めていくかということ。若手の先生が、いきなり最初からベテランの先生のような授業はできない。初任1、2年の先生に教員歴30年の先生の授業をそのまま見せても効果は期待できないし、逆に消化不良で自信を失うという心配もある。初任5年目ぐらいに期待される授業を示すことが必要。スモールステップで力量をのばす。ステップの幅は人により異なるから、そこを客観的に見極めるメンターの役割を担う先生が校内に必要ではないか。メンターはこれからの中堅以降の先生方の役割でもある。自分の指導力を客観化することからまず始めたらよいと思う。

【浅田教頭】 槻の木の先生方の年齢構成は、50・60代が約6割、20代、30代、40代はほぼ同数。他校に比べ20代、30代が多いと思われる。若手教員対象にスキルアップ研修を実施。対象を初任者だけではなく、採用2、3年めまでとしており人数が増えている。良い雰囲気が進んでいる。

【平野校長】 今回、若手の先生方に他校の授業を見に行ってもらっている。管理職がすべて準備するのではなく、本当に見たい授業、聞きたい内容をあらかじめ調査したうえで、各教科1～2名を別々に派遣し、その際の時間調整などは先生方に委ね、直接相手校の先生としてもらっている。この取り組みは、この協議会で前回いただいた「新人社員を他社に派遣させている」「小さな成功体験を積み重ねさせている」といった意見がヒントになった。

【入江委員】先生方には授業で勝負をしてほしいと言っている。中学校の場合、授業研究後の研究協議の中で授業力の向上が期待される。以前は自分が学んだ先生の授業のスタイルをそのまま自分の授業に生かすことでよかった。それではだめで、今なら、どのようにグループで子供が他の子供に教えられるか、教えることで学力が定着していくという考え方。中学校の指導方法も小学校の指導方法と共有していくという流れがある。このように、中学校での授業研究は進んでいる。授業力の話ではないが、高校の通学区域が撤廃されるがあまり影響はないと考えているが、槻の木高校としてはどうお考えか。

【浅田教頭】授業力向上計画の策定は、校長が提唱。本校は教科で議論する機会が少なかった。これまでは、分掌中心の学校づくりをしてきた。校長は、「個人商店からブランドショッピング街へ」とよく言われる。話し合いのきっかけとして「学習 can-do リスト」の作成をテーマとした。3年間でどんなことを身に付けさせるのか、そのためには、各学年・学期ではでどうなのか、評価指標はどうなのかも議論していただいている。昨日、2回目の一斉教科会議を行い、来週は、各教科のリストを持ち寄り、教科を越えての検討結果の共有会議ー教科ホネットーク共有会議ーを実施。職員室の雰囲気も少し変わってきている。若手教員とベテラン教員が、生徒指導や学級経営のことについて意見交換するようすは見られたが、最近、教科の目標などについて意見交換をする光景を見るようになった。これは今までになかったこと。

【平野校長】共有会議も各教科からの発表だけで終わるのではなく、文系教科グループ、理系教科グループ、実技系教科グループに分かれて議論する。通学区域に関しては、地理的には枚方方面から高槻市内の南部は近いので一定の生徒の移動はあるだろうが、府立高校の多くが増学級になっていて十分な募集学級数が用意されていて混乱はしないと思う。槻の木は、通学区域撤廃があっても、これまで取り組んできたことを広報し、ぶれる必要はないと思っている。槻の木の今後であるが、今までの良いところは維持し、時代に合った形でプラスアルファしていくようなイメージを持っている。28年度選抜から制度が抜本的に変わると聞いているが、これまで通り、早い時期に生徒を選抜することができる状態が維持されるのかどうかは、槻の木にとってが大きな影響があると思っている。

【澤田委員】府立の歴史のある高校から、槻の木高校に視察に来られたとのことだが、どのような役割の方が来られたのか。

【山本首席】教務・進路・学年主任・広報担当者が来られた。

【澤田委員】槻の木の何を知りたがっておられたのか。

【山本首席】10年間という短い期間で、何をすればこのように改革できるのかを聞きに来られた。本校としては、表面化しない積み重ねがあって、結果としてさまざまな取り組みが顕在化したのであって、そのように説明するのだが、即効性のある取り組みのノウハウを知りたがっておられるように感じた。それは学校改革のきっかけになる取り組みを早く導入したいという思いからだと思う。

【澤田委員】伝統校が知りたがっておられるのは、榎の木の強みではないか。

【平野校長】伝統校はブランド力があり、伝統を変えることがブランド力の低下につながると考えられてきたが、この10年ほどの社会変化や学校へのニーズの変化は、伝統校にも、伝統よりも変革が求められている。

【浅田教頭】視察された先生方は、職員のネクタイの着用率や、職員朝礼で全職員が起立してあいさつするようすに驚かれていた。

【山本首席】教科指導においても、良い意味で教員間に緊張感がほしい。教員が生徒に追い越されるかもしれないという恐怖を持つ緊張感があればよいのだが。そういう生徒が一部でよいので来てほしいところ。1教科だけでも到達度が高い生徒が入ることもいいのではないか。過去にもそんな生徒がいた。その生徒は、苦手科目も克服し現役で国立大学に入学し、来春大学院に進み研究を続けている。

【平野校長】生徒が教師を超えることは、教師冥利に尽きる。今年度から府立高校全校で生徒による授業アンケートが実施された。若い先生方の授業の評価が高い傾向にある。若い先生方には喜んでもらってよいが、そこで満足してはいけないと思う。

【宮坂委員】あくまでも生徒の主観的な評価であり、客観性が担保されているわけではない。教員のプロとしてどうかは別の問題。本当は、メンターがきっちり評価するのが良いのだが。

【柿原委員】企業においても2、3年目の社員が、自分なりのテクニックを習得して接客すると、お客様の評価が高くなる。ベテランだとお客様も構えてしまうが、若手だと気軽に対応できる。若手の先生方は年齢的にも生徒に近いので、父母世代の先生よりはしゃべりやすいのは当たり前。しかし、販売力では若手はベテランには勝てない。若手社員は「お客様の中には私のファンが多い。」と言うがそれは勘違い。厳しい上司が注意する。そんな厳しさも重要。また、他校からの視察の話だが、今在籍してられる先生方は、今の学校の状態がその学校の姿だと思っている。幸い、榎の木高校は10年前からの歩みを知っている

先生方もおられ、創立当初の理念が生きている。ここ数年は、今の強みを生かして邁進すべき。新しく来られた創立当初をご存じない先生方が、創立時の理念を踏まえる必要がある。

【浅田教頭】若手も一定緊張感をもって仕事をしており、ベテランから学ぼうとしている。

【柿原委員】榎の木が伸びたのは、先生方の仲の良さ。いい顔をされている。外来者への対応もすばらしい。

【浅田教頭】若い先生方が、朝でも生徒の家庭からの電話を積極的にとる。首席が電話の取り方から研修している。

【芝井委員】他の府立高校ではなかなか見られない。民間では、電話を受けた者が会社名等を名乗るのが常識なのだが。

【柿原委員】榎の木高校に電話すると、きっちりと対応している。

【山本首席】そのようなことから、信用を失わないようにしている。

【浅田教頭】ただ電話を取るだけでなく、内容により次にどうすればよいかまで研修しているので、若手教員が電話を取っても戸惑うことはない。

【芝井委員】家庭でも電話を取らない家もあり、普段は友人同士のスマホなので、大学生でも電話を取れない者は結構いる。

【浅田首席】電話対応ができると自信がついてうれしんだと思う。

【平野校長】教員として外部との接点で対応することは重要。

【宮坂委員】保護者などで学校に聞きたいことがあるけれども、ハードルが高いと感じておられる方には、敷居の低いコンセルジェ的な窓口も必要ではないか。電話はワンストップであることが大切。初期の対応のよさが求められる。

【浅田教頭】電話の取り方だけでなく、本校でのベテラン教員が若手教員の様々なことを伝承しているのだと思う。現行制度で、初任6年で他校に移ることになるのは、ある意味では残念。

## 5. 委員よりの提言

【浅田教頭】3月にも引き続き、槻の木 of 強みや新たな取り組みについてお考えいただくこととし、お一方ずつご提言を。

【入江委員】学校では、プラスがプラスを次々と生み出していく。槻の木はまさにそのような状況。英語教育のことが話題になっているが、「英語はツールであって教養も大事。課題を見つけて解決する力が重要。」との教育委員の発言（学校協議会に先立って行われた「槻の木 MANABI カフェで、井上貴弘教育委員が講演。」）を聞き、槻の木の生徒にも、日本の文化や芸術など幅広い教養を身に付けさせれば、強みになるのではないかと思った。第一中学校では、「本物を体験させる」ということから、大学生のアスリートに体育祭で走ってもらったり、バスケット選手を招へいしたり、OSKの方にダンスをしてもらったりしている。参考にしていただければありがたい。

【柿原委員】「気づき」がたいせつ。高槻市にはミュージシャンなども結構お住まいになっており、コンタクトをとって、高校生と交流すればよい。プロも今の高校生がどう感じているかを理解できる機会になる。高槻ジャズストリートに参加していた宇崎竜童さんが、槻の木生に会ったらしく、「ここの高校生はまじめだ。」と感想を漏らしておられたとのこと。頼めば来てくれる。そういう人材も活用すればよい。槻の木 MANABI カフェのように、学びの場をいろいろな場面で設定し、生徒だけでなく、保護者や先生方も一緒に共有する取り組みも進めていただきたい。

【澤田委員】「卒業生は宝」との校長の発言のとおり、これから槻の木が歴史を重ねればその宝が増える。宝を活用するという意味で、卒業生の成功体験を在校生に聞かせてほしい。在校生の学習意欲も向上するのではないか。また、担任と生徒・保護者との懇談の機会が増えたのは、他県の実践を参考にしたとの説明があったが、他県の先進的な取り組みをどんどん取り入れていかればよいのではないか。

【芝井委員】先生は生徒から真剣に頼られると頑張る。それは負担にも感じないもの。うまくそういう回路がまわるような仕組みをつくることが大事。勉強のことでもクラブのことでも、広い意味での生き方や家庭の問題など、先生と生徒が接点を意識的に多く持つよう工夫することが重要。システムをつくることより、そのような根っこの部分を大切にしたい。ある調査によると、お箸をきちんと持つことができるのは、約半数。学生に限ると、持てないの方が過半数を超えるとのこと。そういうことを教えてほしいし、教えることに意味があることも教えてほしい。勉強も大切だが、きちんと躰けられていること

も大事。豊かな日本だけの視点ではなく、世界のことを語ってあげてほしい。世界に目を向ければ志も生まれる。日本社会の中では、行政任せにする傾向があるなど、志がなかなか育ちにくい。広く目を向ければ、目の前の小さなことに悩む必要はなくなる。立身出世をせよとか、金持ちになれとかいう意味ではなく、偉い人になれとストレートに言ってあげてほしい。しっかりした大人になることが幸せにつながり、世の中にとっても大事なこと。

【立石委員】近隣に住んでいるが、これだけ変化した学校は珍しい。韓国は隣国でもあり、高校生が交流することには意義がある。韓国では英語教育も充実していると聞く。韓国の方々も以前に比べると親日的。国際交流の取り組みを評価したい。

【永田委員】弊社では塾なので、教務的な課題だけでなく営業的な課題もあるが、そのような諸々の課題より、組織課題を重視。例えば企業にとって電話を取ることは、組織としての課題。会社を代表して取り、次の部署につなげる。他者とのつながりや人の役に立つことを徹底的に身に付けることが重要。最近の新人を見ていても授業がうまくなりたいとか、給料が良くなりたいとかいうより、周りの役に立ちたいとか、周りに働きかけたいといった気持ちの方が強いような気がする。榎の木が教科に軸を据えることももちろん大事だが、逆に、今まで榎の木が伸びてきたのは組織を大切にしてきたから。そのことは再確認すべき。もう1点はカリキュラムについて。カリキュラムは単純化すれば、集中と選択。生徒をある学力層に集中させ、その中で科目選択をさせる方法。しかし価値観が多様化し、選択にバラバラ感がある。カリキュラムを固めて教え込むという方法も転換期をむかえている。さらに言えば生徒が持つ自ら学ぶ力を伸ばすことも考えなければならない。榎の木にとっては基礎学力の定着に努めてきたことが強み。朝早く学校に来て、授業をしっかり受けて、ノートをちゃんととって宿題をする。塾で取り組んでいるのが、高校入試の小論文対策。辞書を引いたこともない生徒が多い中で、言語能力・論理力をどう身に付けるかという視点から授業を再構築していかなければならない。こうした根幹的な学力形成は今後の新たな強みを考える際のヒントになるのではないか。

【宮坂委員】国レベルでは、次の学習指導要領についての動きが始まっている。高校生にどのような基礎的な学力を身に付けさせるかという議論も参考にされたい。大学入試改革への対応も必要。成績を何段階かに分けるのであれば、有利・不利が生じる。高校の基礎力テストも議論されているが、当初は高校教育の質の保証からでてきた話であり、大学入試改革とは別の議論だった。基礎力テストを用いて各学校の質を保証するのは自分自身の否定につながる。大阪の高校入試改革も注目すべき。通学区域撤廃が榎の木をクローズアップすることになるかもしれない。榎の木は再編整備計画の対象外ということではなく、うまく利用すればよい。日本の子供の学力は国際的に見て順位が高いが、勉強が好き・役

立つという回答が極端に少ないのが特徴。モチベーションがないのに学力が高い。いやいややるのではない学習への転換が必要。また、自己肯定感が低いのも特徴。自信が持てないことは、相手とコミュニケーションがとれないことや、提案や創造していけないことと関連している。英語力だけでなく、国際競争力というのであれば、まず、このような実態を分析すべき。